



アルバイトから始まった 鷲・土工の仕事

人生の転機は、いったい何によってもたらされるのか。大石社長の場合は、スポーツが「縁」となったようです。

中学生まで過ごしたのは、かつて空知管内で産炭地として名を馳せた赤平市。夏は野球、冬はスキーに明け暮れたスポーツマンの大石さんはその後、全国高校スキー大会団体で連覇（1964・65年）を果たしたスキー部の名門・札幌商業高校へ進学。さらに政法大学へ進学し、アスリートとして日夜「心技体」の鍛錬に努め、ノルディック複合の強化選手に選ばれるまでになりました。



大石社長は現在でも毎日現場に立つ。1日3カ所現場等を回るのが日課で「プロとはかくありなん」と、その勇姿を若い世代に見せることで育てている。

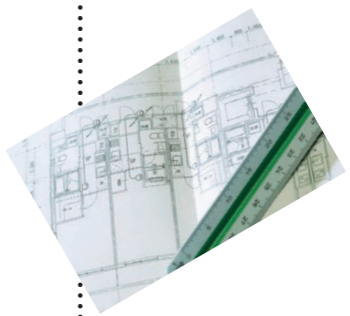
大石良治さん

株式会社 大石建設 代表取締役社長

「信頼」「実績」「安全」をモットーとする

プロフェッショナルな建設集団が、国土を守る。

大地の創造 空間への前進 『株大石建設』



「ちょうど大学4年生の時が、札幌オリンピック（1972）の年

だった。しかし、夢だった五輪出場を借しくも逃した大石さんは、くじけそうな心を仰いでいたところ、かねてからお世話になっ

ていた恩師、八木祐四郎さんに声をかけられることに。

「実業団チームを北海道につくるので、うちの会社へ来ないか」。

導かれるままに、大石さんはビルメンテナンスの仕事に就きました。

好きな言葉

「誠心誠意」

好きな論語

「仁」

「己れの欲せざるところ、これを人に施すなかれ」。孔子は「仁」とは、思いやりの心で万人を愛し、利己的な欲望を抑えて礼儀をとりおこなうことであると説いた。一方、孟子は惻隱（そくいん）の心が仁の端（はじめ）であると。「赤ん坊が井戸に落ちようとしているとき、それを見た人が無意識に赤ん坊を助けようと思っ心である」。



「とにかく仕事が忙しくて人手が足りないから、私に手伝ってくれと言うのです。同郷の上、白球を追いかけた仲でしたから無碍にも断れず、それでアルバイトに入ったのが『鷲・土工』の仕事でした」。

まさかその仕事为天職になるとは、本人も思っていなかったとか。しかし日が経つに連れ、現場に立つうちに、忘れかけていた「スポーツマン魂」が目覚めてくるのです。それは、スポーツで良い結果を出すために必要とされた「心技体」の錬成に他ならなかったからでした。

『心』は志、精神力、気持ちの強さ、使命感。『技』は技術、スキル、戦略、洞察力、自己判断、独自性。『体』は身体能力、情熱という姿勢、挨拶、マナー、掃除、整頓。

現場で働く職人たちは、ぶっきらぼうな者、手の早い者、無口な者と三者三様でしたが、誰もが己の仕事に自信と誇り、命を賭けて戦うプロの鷲・土工でした。

- 鷲・土工、建築事業
北海道知事許可(特-27)
石第16620号
- 左官工事業
北海道知事許可(特-27)
石第16620号
- 特定労働者派遣事業
北海道労働局
(特01-300543号)
- 1級建築士事務所
北海道知事登録 石第5964号
- 1級建築士4名 ■2級建築士1名
■1級建築施工管理技士3名 ■2級建築施工管理技士3名 ■1級土木施工管理技士5名 ■2級土木施工管理技士3名 ■監理技術者4名
■測量士3名 ■測量士補3名 ■1級とび施工技能士5名 ■登録鷲・土木基幹技能士5名 ■建設マスター(とび工)1名 ■1級左官施工技能士2名 ■1級防水施工技能士1名 ※2016年2月末現在



勤めていた会社そのTKさんの死でした。さらに追い討ちをかけるようにこの国を襲った阪神淡路大震災。すでに業界で頭角を表

鷲・土工の会社から 総合建設業へ

かつて骨身を削り「魂と肉体」を鍛え抜いたアスリートが、水を得た魚のように現場で活躍するのにその時間はかかりませんでした。しかし、大石さんの行く手には大きな転機が待ち受けているのです。

わしていた大石さんは起業し、自分に付いてきてくれる職人5人とともに神戸へ向いました。札幌に戻ってきたのは3年後。どうしても叶えたい夢を持って、まもなく法人化しました。

「それまで北海道では、どう頑張ろうとも鷲・土工では食っていけなかったのです。季節雇用で失業保険をもらったり、出稼ぎへ行くのが当たり前でした。私はその常識を打ち破りたかった。非正規雇用は止め、福利厚生も考え、社会保険をつけたかったのです。冬の長い、雪深い北海道でそれを実現するのが私の夢でした」。

そうして、現場で汗をかく職人の労働環境を守り、仕事に見合った対価として給料を保証するうちに、大石さんの元に「社長、俺を使ってくれないか」と多くの職人たちが集まってくるのです。実は道内の建設業界再編成が始まっていたのです。大企業の吸収合併、倒産、リストラが進むうちに、事務方や背広組よりもむしろ、腕の良い職人たちが職を失い、これまで培ってきたプロ魂と技術を活かすことができない状況に追い込まれていました。

スキー選手を引退し、次に選んだ職業はプロボウラー（ボウリング）。しかしある日、奥さんを亡くされます。当時わずか3歳の男の子との「父子家庭」の生活が始まりました。しかも気がつけば、ボウリングのブームは下火に。「この子を育てるためなら、どんなことでもやってみせる」赤々と闘志を燃やす大石さんは、なり振り構わずトラックに乗りこみ、札幌地下鉄のゴミステーションを回る清掃業に身を置くのでした。このような政法大学OBが他にいますでしょうか。

そんな時、市内南郷で偶然一人の男に出逢います。両者とも思わず、懐かしさに笑みがこぼれます。赤平市住友中学時代の幼なじみで、野球部の先輩TKさんでした。

大石さんの会社の門を叩いたのは、鷲・土工たちだけではありませんでした。建築のプロ、解体のプロ、土木のプロ、左官のプロという具合に、幅広い分野の職人たちが大石建設に集い、その結果、会社の果たすべき役割は総合建設業へと変身していったのです。すでに、50社を数える協力会も生まれ、北海道になくはならない存在です。

若者に選ばれる産業に

誰もが記憶に新しい、東日本大震災。その復旧・復興事業にも貢献した経験から、大石さんは肌身で知っているのです。建設業は国民の安全・安心の土台となる国土を守る重要な役割があり、その誇りを胸に社会に貢献し続ける姿こそが、産業として今後若者に選ばれる唯一の方法であると。そして「建設業は面白い」「やり甲斐がある」「作品が後世に残り末長く人々に愛される」「この仕事が好きだ」と言う新入社員、転職組の途中採用者が増えていることが、何よりも嬉しい…。ちなみに大石建設に定年はなく、資格取得も全面的に支援。また、毎年4月には50項目評価の個人面談があり、自己評価と客観的な役員評価のすり合わせによって、さらに個人の「心技体」の練成と向上に役立てるのでした。大石建設、この会社はすごい！